

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11068

研究課題名（和文）特定妊婦の虐待予防支援スキルの検討

研究課題名（英文）Study on support skill to prevent abuse for specified expectant mothers

研究代表者

堀田 法子 (Hotta, Noriko)

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・名誉教授

研究者番号：90249342

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：特定妊婦の抱える問題と訪問助産師の支援・課題を明らかにすることを目的に、A市で特定妊婦を訪問する助産師10人に半構成的面接を行った。助産師の語りから若年特定妊婦14例、精神障害のある特定妊婦10例を抽出し、SCAT（Steps for Coding and Theorization）の手法を用いて分析した。若年特定妊婦は、特に若年ゆえ自己活動を優先し、育児への姿勢が弱い面が特徴的であった。精神障害のある特定妊婦は、心身症状の管理困難、子の生命を守る育児力不足、意思疎通や育児環境整備困難、支援的家族の欠如、就労困難による経済的困窮の問題がみられた。助産師の支援の特徴と課題が見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児童虐待のリスク要因が報告され子育て支援の取り組みがなされているが、虐待件数は増加の一途を辿っている。特定妊婦への関わりが求められているなか、産後の母親への専門職の援助スキルなどの対応については自己評価が低く、対応が困難であること、家庭訪問に携わる看護師は母親の抱える抑うつや不安の問題に直面しうまく対処できないと感じていることを報告している。今回の研究で、特定妊婦の中でも若年特定妊婦や精神障害のある特定妊婦の問題が明らかになったことで、訪問助産師の支援内容や支援の在り方の方向性が見いだされ、特定妊婦への支援スキルが向上し、児童虐待の予防につながることを期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to describe the issues of specified expectant mother and provided supports and recognized issues among midwives. We gave semi structured interview to 10 midwives visiting home of the mothers in a certain city. The steps for coding and theorization (SCAT) analyzed their narratives.

Young pregnant mothers had unstable social backgrounds such as lack of social habits, economical shortage, poor healthcare, and family history of abuses. They tended to set priority to their own will rather than childcare since they aged younger. Mothers with Mental Disorders had difficulty in managing physical and mental health, communication disorder, lack of renting skills to protect their children's lives, difficulty in creating an environment suitable for care, lack of family support, and financial instability caused by inability to work.

研究分野：成育保健看護学

キーワード：特定妊婦 助産師訪問 若年妊婦 精神障害

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

児童虐待のリスク要因が報告され子育て支援の取り組みがなされているが、虐待件数は増加の一途を辿っている。2009年に特定妊婦の支援まで広がっている。このように特定妊婦への関わりが求められているなか、産後の母親への専門職の援助スキルについて、精神科既往妊婦や虐待リスクの母親への対応については自己評価が低く、対応が困難であること、家庭訪問に携わる看護師は母親の抱える抑うつや不安の問題に直面しうまく対処できないと感じていることを報告している。

そこで、特定妊婦への助産師の支援内容や支援の困難さなどの問題を明らかにすることで、特定妊婦への支援スキルが向上し、児童虐待の予防につながることを期待できる。

2. 研究の目的

A市の特定妊婦家庭訪問を行っている助産師から、妊婦の問題(身体・精神・社会的状況)、子ども家族、環境問題について、特定妊婦自身がどのような対処行動をとっているか、とれていないか(どのように向き合っているか)、その時の助産師の支援内容や関わりの難しさについて明らかにする。それは、特定妊婦を支援する訪問助産師の支援スキルの向上につながると考えた。

3. 研究の方法

研究対象者：A市の特定妊婦訪問支援事業を委託された県の助産師会に在籍する、特定妊婦家庭訪問の実施経験をもつ訪問助産師10人とした。助産師会の理事より研究対象者の選定と紹介を受け依頼した。

調査期間：2019年8月～9月。

調査方法：調査方法はインタビューガイドに沿って、1時間程度の半構成的面接を行った。調査内容は、訪問を実施した特定妊婦の身体的心理的および社会的状況、訪問助産師の支援の内容、支援の困難さを含めた状況についてとした。内容は研究対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。

分析方法：得られたインタビューの録音内容を逐語録に起こした。逐語録の記述内容から、若年特定妊婦および精神障害のある特定妊婦を示す事例を抽出し、Steps for Coding and Theorization手法を用いて分析した。SCATの分析では、質的データをセグメント化し、それぞれに<1>データの中の着目すべき語句、<2>テキスト中の語句の言い換え、<3>それを説明するようなテキスト外概念、<4>テーマ・構成概念(以下、構成概念と表記)の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングを行い、構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論記述を行う。ストーリーラインは「データの深層の意味を再文脈化した、複合的で構造的な記述になっているので、ストーリーラインを断片化することで、理論記述が行える」とされている。この過程に沿うことで特定妊婦の特異性について、語りの潜在的意味を考慮したより詳細な分析が可能になると考えて採用した。分析は研究者間で行い、本研究の研究者にはSCATに精通した者を含んだ。

倫理的配慮：名古屋市立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認を得た(承認番号18036)。養育支援訪問事業を行うA市の担当局に研究の概要、目的、研究の協力は個人の自由意志であることを文書と口頭で説明し、文書と口頭で許可を得たうえで、助産師会に文書と口頭で研究依頼をした。研究協力者に、研究目的、意義、個人情報保護、ICレコーダーの使用、データ管理、研究は自由参加であり、研究辞退による不利益はないことを文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。

4. 研究成果

若年特定妊婦と精神障害のある特定妊婦の問題を分けて検討した。

(1) 若年特定妊婦の問題と助産師の支援・課題

用語の定義：若年特定妊婦とは、A市の規定で定められた24歳以下であり、訪問助産師による支援が必要な特定妊婦とした。

研究対象者：訪問助産師は平均57.2±10.5歳、新生児訪問経験平均8.4年、特定妊婦への訪問経験平均4.3年、特定妊婦への訪問件数は平均5.9件、インタビュー時間は28～107分（平均70.8分）。若年特定妊婦を示す事例を、訪問助産師9人の語りから計14例抽出し、分析対象とした。若年特定妊婦の特性は、中高生3例、未婚5例、身体的疾患1例、精神疾患3例、若年特定妊婦自身が被虐待児4例、施設で育つ2例、外国人1例（事例の重複あり）であった。

本文に適宜説明を加えて表記した。本文の構成概念は下線で示した。また、構成概念は、データ解釈のため独自作成する用語で必ずしも理解しやすい言葉とならないため、適宜「構成概念の内容（構成概念名）」と表記した。

若年特定妊婦支援の背景

若年特定妊婦は、夫やパートナーといった育児協働者とともに育児実施者となり、両親やきょうだいといった育児補完者が支え、その間には育児者間関係が存在する。訪問助産師は、訪問の中で特定妊婦 - 助産師関係、育児協働者 - 助産師関係、育児補完者 - 助産師関係を築くが、育児協働者や育児補完者と接点がない場合、関係を構築するのが難しい（助産師関係形成困難）ケースもあった。

若年特定妊婦訪問における助産師の支援の在り方

若年特定妊婦は、生活基盤が脆弱であり（生活基盤不安定）、若年特定妊婦と育児協働者、育児補完者との関係性が不安定であり（育児者間関係不安定）、子どもを育てていく姿勢の弱さがあり（育児志向不安定）、育児技術が未熟である（育児技術不安定）という安定した育児が行えない状態（安定的育児関係非構築）にあった。助産師は、保健センター等の依頼機関との目的ズレ感をもち、訪問開始前の依頼機関との訪問目的や内容確認の必要性（訪問開始前の引継ぎ必要性）を感じ、支援開始後も他職種との連携必要性を感じながら支援を行っていた。助産師は、安定的育児関係非構築に対し、保健師を通した保育所や市町村民生課等の他施設・他職種と連携した支援（連携的支援）、安全な妊娠・出産・育児に必要な指導支援（指導的支援）、母子愛着形成のための支援（愛着育成支援）、あたたかく包み込み、否定をすることなく受け入れる姿勢を示す支援（包容的支援）、育児者間関係を調整するための家族支援（育児者間関係調整支援）といった若年特定妊婦が育児を行える状態を構築するための支援（育児関係構築支援）を実施していた。助産師は、育児実施者の生活基盤が安定する（生活基盤安定）、育児協働者や育児補完者との関係性が良好となる（育児者間関係安定）、妊娠し子どもを育てていく育児への意思や前向きな姿勢をもつ（育児志向安定）、育児技術を得る（育児技術安定）といった安定した育児が行える状態（安定的育児関係構築）を目指していた。助産師は、特定妊婦との関係維持しながら支援を行うが、A市の特定妊婦への訪問事業における「3・4か月健康診査まで」という期間に従った制度的な訪問の強制終了や保育士や児童相談所など職種判断による保護的母子引き離しによる強制終了となるケースもあった。その場合、助産師支援の不全感や特定妊婦訪問の心残り、訪問終了によるモヤモヤ感、訪問後の見通しが確認できない状況（特定妊婦訪問後の見通し不明瞭）を抱えながら安定的育児関係構築の諦めに至っており、継続的に若年特定妊婦と関わる機関への引継ぎの必要性（訪問終了後の引継ぎ必要性）があった。

若年特定妊婦訪問における助産師の具体的支援内容

生活基盤不安定、育児者間関係不安定、育児志向不安定、育児技術不安定について各々具体的内容を示す。

・生活基盤不安定への支援

生活基盤不安定には、金銭面生活基盤不安定や慣習面生活基盤不安定、健康面生活基盤不安定、成育面生活基盤不安定が存在した。育児補完者も含めた金銭面生活基盤不安定に対し、民生課や保育所といった行政との連携的支援を実施し、時には育児補完者からの生活支援を得ながら金銭面生活基盤安定へ向けて支援していた。生活能力の低さといった慣習面生活基盤不安定に対し、生まれてくる子どもの成育環境に配慮した指導的支援や連携的支援、思いの傾聴といった包容的支援を実施することで、慣習面生活基盤安定へ向けて支援していた。被虐待歴といった成育面生活基盤不安定に対し、助産師は、若年特定妊婦を一人の大切な支援対象として認めること（支援者としてのあなた）としてとらえ、包容的支援を実施することで成育面生活基盤安定へ向けて支援していた。精神疾患といった健康面生活基盤不安定に対して、入院中に助産師が行政のサポートチーム会議に参加するといった連携的支援を行うことで、無事出産を迎える健康面生活基盤安定へ向けて支援していた。

・育児者間関係不安定への支援

育児者間関係不安定には、特定妊婦 - 育児協働者間関係不安定、特定妊婦 - 育児補完者間関係不安定、育児協働者 - 育児補完者間関係不安定が存在した。育児協働者が若年や学生、育児への関心が希薄などを理由に役割を果たせない非機能的育児協働者の場合、特定妊婦 - 育児協働者間関係不安定がみられ、特定妊婦の育児負担軽減の代弁や育児協働者の育児意識化促しといった育児者間関係調整支援を行うことで特定妊婦 - 育児協働者間関係安定へ向けて支援していた。育児補完者が若年妊娠への拒否感や育児能力不足、高齢といった理由により役割を果たせない非機能的育児補完者の場合、特定妊婦 - 育児補完者間関係不安定がみられ、包容的支援や育児者間関係調整支援を行い特定妊婦 - 育児補完者間関係安定へ向けて支援していた。

・育児志向不安定への支援

育児志向不安定には、喫煙が止められない、身体を冷やすような服装、出産後すぐに働きたい、約束していた訪問時の不在、パートナーとは異なる男性の存在といった自己活動中心的育児志向不安定がみられた。若年特定妊婦と一緒に心音を聴くことや子どものいる生活イメージをつけることで子どもへの関心を引き出すといった愛着育成的支援や、若年特定妊婦自身の存在の大切さを言葉で伝えるといった包容的支援、子どもへの影響に配慮した禁煙や生活習慣指導といった指導的支援により、育児に対する自覚の芽生えた状態（育児志向萌芽）、さらに育児志向安定へと段階的に導いていた。

・育児技術不安定への支援

哺乳方法や沐浴などの育児技術不安定には、母乳と人工乳の選択は本人の意向を受けとめて尊重するといった指導的支援と包容的支援の両立を行いながら、育児技術安定へ向けて支援していた。

若年特定妊婦については、若年特定妊婦の特性を見極めて実施する支援スキルが求められる。しかし、助産師は、自身が必要と考える支援と、訪問の依頼機関に求められて実施できる支援との間にジレンマを抱えていると考えられた。助産師の支援スキルの十分な発揮、さらにその先の児童虐待防止につなげていくためには、制度の緩和や他職種他機関との情報共有や目標の統一といった、支援が実施できる体制の構築や維持もまた求められる。

(2) 精神障害のある特定妊婦の問題と助産師の支援・課題

精神障害のある特定妊婦への支援について語っていた助産師は10人のうち7人であった。精神障害のある特定妊婦について語った時間は合計2時間17分47秒であり、助産師の語りから抽出した精神障害の種類は、パニック障害2例、うつ病2例、統合失調症4例、摂食障害1例、精神疾患名不明1例で、合計10例であった。

精神障害のある特定妊婦の問題

精神障害のある特定妊婦は、精神疾患による心身症状のコントロールが難しい（心身症状の管理困難）、育児力不足 精神疾患の症状により育児の中で子どもの生命を守ることが難しい（子どもの生命を守る育児力不足）、精神疾患の症状により約束や決め事の意味疎通が難しい（意思疎通困難）、精神疾患の症状により育児環境を整えられない（育児環境の整備困難）、成育歴や異性関係の問題から支援的な家族がいない（支援的な家族の欠如）、精神疾患の症状により継続な就労が行えず、経済的に困窮している（就労困難による経済的困窮）の6つの問題を抱えていた。

精神障害のある特定妊婦の訪問助産師による支援

訪問助産師は、母の健康を守り安定させる（母体の健康安定支援）、育児方法と子どもの順調な 発育を支える（子どもの安全な成長発育支援）、家族からの支援体制を強化する（家族のサポート力のエンパワメント）、支援のベースとなる精神障害に合わせ関係性を構築する（精神症状に対応した支援的關係）の構築の4つの支援を行っていた。

精神障害のある特定妊婦支援上の課題

精神障害の特性によるコミュニケーションの難しさ（精神障害の特性によるコミュニケーション困難）や多職種との協力関係が不十分（多職種連携の非構築）といった2つの課題を感じていた。

精神障害のある特定妊婦への支援上の問題として、精神症状の対応が困難、多職種連携の非構築を課題として捉えていることが明らかとなり、今後、精神障害がもたらす背景や症状の理解、精神障害のある特定妊婦への対応スキル向上、多職種連携での共通した目標設定や支援方針の共有が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 赤羽根章子、遠藤晋作、木村奈緒美、渡邊莉央、上田敏丈、堀田法子	4. 巻 81
2. 論文標題 若年の特定妊婦の抱える問題と訪問する助産師の支援と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 401-411
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村奈緒美、遠藤晋作、上田敏丈、渡邊莉央、赤羽根章子、堀田法子	4. 巻 20
2. 論文標題 精神障害のある特定妊婦の問題と訪問助産師による支援	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 奈良看護研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊梨央、赤羽根章子、木村奈緒美、遠藤晋作、上田敏丈、堀田法子
2. 発表標題 多胎児をもつ特定妊婦の特徴および助産師の支援と課題
3. 学会等名 第17回子ども学会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤羽根章子、渡邊梨央、上田敏丈、遠藤晋作、堀田法子
2. 発表標題 若年の特定妊婦の状況及び助産師の効果的支援-SCATによる一事例の検討-
3. 学会等名 第67回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	遠藤 晋作 (Endo Shinsaku) (60750883)	名古屋市立大学・大学院看護学研究科・准教授 (23903)	
研究分担者	赤羽根 章子 (Akabane Akiko) (70839357)	名古屋市立大学・大学院看護学研究科・研究員 (23903)	
研究分担者	山口 孝子(久野孝子) (Yamaguchi Takako) (90315896)	名古屋市立大学・大学院看護学研究科・研究員 (23903)	
研究分担者	渡邊 梨央 (Watanabe Rio) (20845549)	名古屋市立大学・大学院看護学研究科・助教 (23903)	
研究分担者	上田 敏丈 (Ueda Harutomo) (60353166)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	
研究分担者	木村 奈緒美 (Kimura Naomi) (80791524)	奈良県立医科大学・医学部・講師 (24601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------